

## 翻 訳

### イ ドクチュ 李 徳周 「初期韓国教会の民族教會的性格」【二】(2/3)

(原題, 이 덕주 “초기 한국교회의 민족교회적 성격”)

## 訳者 常 石 希 望

### 【目次】「初期韓国教会の民族教會的性格」

#### I, 緒論

#### II, 民衆階級の入信動機

II-1), 初期における教育および医療事業：民衆との接触契機

II-2), 嬰兒騒動と平壤キリスト教徒迫害事件：民衆の挑戦と試み

II-3), 民衆の保護所となった教会

————— (以上【一】, 掲載)

#### III, 知識人たちの集団改宗

III-1), 開化派知識人たちの社会改革への試み

III-2), 独立協会運動：民衆民主主義と体制改革運動

III-3), 独立協会事件後の知識人階層の入信

#### IV, 日帝（日本帝国）の侵略とキリスト教徒による民族運動

IV-1), 初期, 非暴力抵抗運動

IV-2), 後期, 武力抵抗運動

————— (以上【二】, 今回掲載分。以下は【三】)

#### V, 復興（リバイバル）運動と教会の非政治化

V-1), 初期復興と民衆の宗教体験

V-2), キリスト教社会倫理の形成

V-3), 教会の非政治化作業

#### VI, まとめ

---

【この翻訳は前号『言語と文化・第16号』（2007年1月・刊）掲載分の続きで、全3回完了。  
原注はアラビア数字のみで示し、[ ] は訳者の補訳・補注を示す等、凡例は前号に従う。】

---

### 【Ⅲ】知識人たちの集団改宗

#### Ⅲ-（1）開化派知識人たちの社会改革への試み

1884～1894年の間にキリスト教は民衆階層のうちに根を下ろした。専制封建主義の社会体制のもと、疎外されていた西北地域〔現、北朝鮮の平壤を含む平安南北道。当時平壤は東洋のエルサレムと称されるに至り、この地域が草創期韓国キリスト教の中心地〕の没落両班階層と民衆階層が教会の中の主導勢力を形成するに至ったが、その主要な要因となったのは1894年の戦争と騒乱〔第二章に述べた、日清戦争と平壤キリスト教徒迫害事件など〕であった。19世紀末の朝鮮社会には、この西北地域の民衆階層のほかにもう一つ別の改革志向勢力があった。その思想的な源を朝鮮時代後期の実学派に求めることのできる開化派知識人たちである。金玉均（キム・オッキョン）を初めとするいわゆる「開化党〔別名：開化独立党、日本党、革新党〕」と称され、朴泳孝（パク・ヨンヒョ）、徐光範（ソ・グアンボム）、洪英植（ホン・ヨンシク）、徐載弼（ソ・ジェピル）、尹雄烈（ユン・ウンニョル）、尹致昊（ユン・チホ）、朴定陽（パク・チョンヤン）、金弘集（キム・ホンジップ）などを挙げることができる<sup>36</sup>。

金玉均を初めとする彼ら開化主義者たちは最初は穏健な社会改革論を推進していたが、次第に急進的な社会改革論へと開化の方法論を構築して行くこととなった。それは朴珪寿（パク・キウス）の死後（1877年）、劉大致（ユ・テチ）、呉慶錫（オ・ギョンソク）、李東仁（イ・ドンイン）といった急進的な改革指導者の影響を受けたためだと解される<sup>37</sup>。彼らはまた1881年以後、日本、アメリカなどを直接視察して開化文明の実態に接することが出来た。「紳士遊覧団」と呼ばれる日本視察団の彼らが、日本に移植された西欧文化を韓国にも導き入れること望み、特に明治維新以降活発に展開されている日本の開化政策を見て、当時20歳代の若い開化主義者たちが韓国においても日本のそれと同じ開化を推進する気になったのも当然のことであった。壬午軍乱（1882年）<sup>[8]</sup>以降、高宗王は金玉均などが主張する開化自強論に耳を傾けていた。長年の間、外交的・政治的宗属関係を結んできた中国（清）との関係清算が、開化主義者たちの第一目標であった。中国の属国としての韓国の位置を脱ぎ捨てて、独立国としての位相を求めることが彼らの目標であった。壬午軍乱以降、ことあるごとに内政干渉に及ぶ中国の傲慢不遜な態度に高宗も嫌気が差していたところであった。30代前半という年齢に入っていた高宗は、大院君の摂政から脱却し自らの政治的手腕をふるうべき年齢になっておりそうする意志も持っていたが、しかし妻の一族である閔氏一派の干渉によりその思いは遂げられずにいた。閔氏一派、それは国内保守勢力の集合体であった。最初は開化派であったにもかかわらず1884年5月、アメリカに行ってきたあと突然開化派と訣別した閔泳翊（ミン・ヨンイク）の態度変化も、開化派や高宗にとつ

ては状況を悪化させた。この閔氏勢力および保守派勢力の背後には中国・清があった。結局開化派の人士たちは、韓国の独立とは中国との宗属関係を清算することだと理解していたのであり、従って彼らは、その中国の勢力を国内に導入しようとしていた閔氏および保守陣営の除去という物理的方法を通し、自らの任務を遂行しようとしたのである。それがすなわち「甲申政変 [カプシン・ジョンピョン, 甲申事変とも称す]」という武力クーデターとして現れたのである。しかしながら、彼らの挙行した大事は「3日天下」に終わってしまった<sup>38</sup>。

甲申政変が失敗に終わった理由は様々に探りうるであろうが、まず最も大きい理由はそのクーデターが民衆の支持を得ることが出来なかったという点に求めることが出来る。少数の急進改革勢力によって推進された運動として民衆の支持を得ることが出来なかったため、結局少数勢力の政変として終わるしかなかったのである。そして、いま一つの失敗の理由、それはこの少数勢力が自分たちの政治目的を遂げるために外国の力、特に日本の力に依り頼ったという点に失敗の要因を求めることが出来る。

甲申政変の失敗により、開化派の社会改革は壁にぶつかってしまった。少数のエリート改革勢力による社会改革の限界点が、そのままに露見したわけである。社会改革は別の方法をもって推進されなければならなかった。上から下へと指示される形態の改革ではなく、むしろ下から上へと押し上げる形態をもって推進されなければならない。すなわち民衆による改革への意志、これが社会改革の第一の出発点とならなければならない。この事件を通して進歩的知識階層は、民衆の支持なくしてはいかなる改革も長く続けることが出来ないのだという歴史的教訓を得た。

甲申政変によって社会・政治的構造を改革しようとした開化派の指導者たちは政変失敗後、その大部分は海外亡命の途についた。金玉均、朴泳孝、徐光範、徐載弼は日本公使館の斡旋で日本に亡命し、尹致昊は駐韓アメリカ公使の斡旋により中国上海に亡命した。これらのうち徐載弼と尹致昊に注目する必要がある。なぜなら、彼らは二人とも政治改革に志を抱いた進歩的知識人であったが海外亡命期間中にキリスト教に改宗し、国内情勢が開化派に有利に反転しはじめた1895～96年に帰国し、近代民主主義の民族運動体である「独立協会・The Independent Club」を創設した重要人物であるためだ<sup>39</sup>。

特に独立協会創設の主役・徐載弼の帰国後の活動は、キリスト教に対する知識人の認識を変化させる重要な契機となった<sup>40</sup>。

アメリカの市民権を有していた徐載弼が帰国したのは1895年12月であった。彼は帰国するや、西欧式の民主主義を韓国において実現しようとする強い政治的意志を抱いていた。しかし春生門事件の後、保守派に有利に転じた政情の煽りを受け、彼には中樞院顧問という閑職が与えられた。政治を介しての民主主義実現は、その最初の段階から行き詰まって

しまった。彼はやり方を変えた。そこで着手したのが「独立新聞」の創刊(1896. 4. 7)であった。純粹にハングル文字のみを用いるという近代的マスコミ(言論)は、このようにして始められた。印刷は培材学堂の中にあった美以美教会[米監理教, メソジスト]印刷所で行なつた<sup>41</sup>。マスコミによる民衆の啓蒙が、社会変革への近道であることを徐 載弼は知っていた。それまでは明かされず隠されてきた執権層の不正や権力の深層聖域が、「独立新聞」によって公開され、崩されたのである。人民の知る権利と物言う権利を「独立新聞」は忠実に代弁した。

こうした民衆への啓蒙運動を通して政府の腐敗と不正にブレーキをかける一方、外国勢力による侵略の現実も客観的に露見させた。すなわち“民衆の意識化過程”が形成されたのである。「独立新聞」が[漢文ではなく]、民衆の文字であるハングルによってのみ発行されたのにも理由があったのである。

徐 載弼が次に着手したのは、保守勢力による慕華思想[中華中国を慕う思想]の象徴であった西大門外部の迎恩門を破壊し、そこに独立門を建設したことである<sup>42</sup>。迎恩門は代々の中国の使節たちを迎え入れるための門であって、その横には慕華館があり中国の使節たちが泊つたりした。これも、中国への事大主義[大に事える]思想を象徴する建物であった。

民衆の絶対的な後押しを得て「独立新聞」発行および独立門の建設を成し遂げた徐 載弼は、さらに積極的な政治的目的を有す団体「独立協会」を創設した。独立門建設基金の募金運動が契機となり、安 駟寿(アン・ギョンス)、李 完用(イ・ワニョン)、金 嘉鎮(キム・カジン)、玄 亨喆(ヒョン・ホンテク)、李 商在(イ・サンジェ)、南宮 憶(ナムグン・オク)、呉 世昌(オ・セチャン)、鄭 喬(チョン・ギョ)などを役員とした独立協会が1896年7月2日に組織された<sup>43</sup>。近代的な民間政治団体が出現したのである。

独立協会の基本理念は自主国権、自由民権、自強改革の三つの思想にまとめることができる<sup>44</sup>。すなわち自主・自由・自強として簡約化するこの独立協会の理念と精神は、当時外国勢力の政治・経済的侵略の危険と現実下にあった朝鮮の状況に対処するための主体的思想として表明されたものであり、またその運動路線として展開されたものであった。しかもそれが政府当局からではなく、純粹な民間次元の運動圏から形成された点に、この運動が[韓国]民族運動史において占める意味の大きさがあると言えよう。独立協会の運動は「韓国人による、韓国人のための、真正の近代市民社会<sup>45</sup>」を成し遂げようとする運動として、韓国近代史に転機を与えた決定的事件であった。

仮にキリスト者である徐 載弼がこの運動を導いていなかったとしても、キリスト教はこの運動に積極的に参与したであろうし、民族運動に向けての力を育成していったであろう。

1896年11月21日独立門の基礎を据える日、多くの民衆がその場に集まり祝賀を催したが、その式典の順序の中には材培学堂の学生たちによる祝歌とアペンゼラーの祈禱が

入っていた。アペンゼラーは「朝鮮大君主陛下と皇太子殿下におかれては御身体が健やかであられ、朝鮮の独立が幾万年を経ても崩壊することなく、朝鮮全国の人民がいよいよ学識に富み、財が増し、新しい人間となるように<sup>46</sup>」と祈った。

多くのキリスト者たちも、こうした独立協会の運動に進んで加わった。初期韓国教会が忠君愛国的なキリスト教へと定着化していく契機も、この時期に基礎が敷かれた。「独立新聞」は、かかるキリスト教徒たちの独立思想を紹介するのに紙面を惜しまなかった。

尚洞(サンドン)教会の教会員たちが歌っていた「愛国の歌」も「独立新聞」が紹介している。

「独立公園を しっかり造り 太極旗を 高くかかげよう、  
上下万民よ 心を一つにし 文明礼儀を 成し遂げよう、  
全国の人民よ 深く愛し合い [我が国が] 富強世界 [に至ること] を 昼夜祈ろう。  
近隣の家々は 互いを理解し 早く 心を一つにしよう、  
千年の歳月を 無為に過ごさず 心を合わせ 共に助け合おう、  
神には 真心からの祈り、 国の平和と 万人の安楽を。  
王の軍を奉祝し 政府を愛し 学徒兵の 純粋な剣を愛し、  
人は皆 愛する子を育て 公平社会の到来に つとめよう、  
この世に 生きている時には 国の泰平に 勝るものはない。  
国旗を握りしめ誓約し 大君主の 徳の高昇を [ともに] 助けよう。」<sup>47</sup>

忠君愛国に尽くす教会の姿を、ここに確認することが出来る。外国勢力による政治・経済的侵略を前にして、民族の自尊心が危険にさらされている危機的状況において、キリスト教徒たちは国の独立を謳歌しつつ「愛国」を生活化しようと努めた<sup>48</sup>。

しかしながら「忠君愛国」という概念を分析すれば、開化派の背景であった進歩的知識人層が有している“改革への意志”には限界があることが分る。特に「忠君」が「愛国」の前提条件になっているという事実から、封建主義社会体制に対する肯定的な姿勢を読み取ることができる。「忠君」の対象、それは高宗に象徴される封建的社会秩序であった。開化派知識人たちが対決し摘発しようとした対象は、封建的社会体制それ自体ではなく、体制内の保守的名門勢力が対決の対象であった。つまり彼ら開化派知識人たちは、封建主義社会体制の骨格はそのまま温存した上で、ただ体制内に残っている保守勢力を放逐しようとしたのである。また彼らが、明治維新以降の日本やイギリスの立憲君主制形態という政治体制に魅力を感じ、朝鮮においてもそうした皇室体制を維持しようとした理由もここにあった<sup>49</sup>。こうした点から初期独立協会運動が目指していた社会改革の論理は、単に体制

内の一部に向けてなされた緩慢的な改革であったとすることができ、従ってそれは民衆の反乱や東学農民戦争の場合のような体制全般に対する改革運動とは異なっていた。進歩的知識人層が抱いていたのは、単に改良主義的な改革論理であったのだという点がここから確認できる。

### III-(2) 独立協会の運動：民衆民主主義と体制改革運動

西欧的、特にアメリカ式民主主義をこの地に実践して見せようとする強靱な意志を有していた徐 載弼の行動は、キリスト教信仰者の立場から生じるものであった。彼の演説によく使われた主題は主権在民であった。

「いかに強い人間や政府といえども、神が与えられた権利を諸君や私から奪い取ることは出来ない。いかなる政府といえども、国民の願いを無視するような政府は国民の仇敵である。」<sup>50</sup>

政府が奪い取ることの出来ない天賦の人権、これを守り、これを享受することから民主主義は始まる。すべての権力と権利が国王に由来すると言われた従来の封建主義的人権概念を打破することは、避けられなかった。国王の座に神を代置させ、従って国王という絶対的概念が相対的概念になるしかなかった。国王も神の前では、一般の民と変わるところのない被造物である、という思想がここから始まったのである。絶対王権に基づいて支えられていた専制封建主義体制の崩壊は、必至であった。独立協会運動が、初期には忠君愛国的運動として展開されたのに、その末期においては近代市民社会の樹立運動に変わるようになった理由もこの点にあると理解しうる。すなわち、独立協会運動は初期には高宗を中心<sup>す</sup>に据えた国権回復運動に焦点が合わされていたのに、それはやがて政府（政治体制）改革運動へと方向が変えられたのである<sup>51</sup>。まさしくこの点が独立協会解散の理由となったのではあるが、独立協会こそはわが国が専制封建主義社会体制から近代市民社会体制へと変革していく決定的な転機を備えてくれた運動だったと言えよう。たしかに、アメリカ式民主主義が独立協会運動の指標になっていた点からして、その限界は認めるしかないとしても、主権在民に基づいた近代市民社会形成に及ぼしたその功績は高く評価されるべきものである。このような近代市民社会の形成は、民衆の自覚運動から開始された。専制封建主義体制下抑圧されていた階層の人々が、天が与えた人権に目覚めそれを主張しつつ享有しようとすることから、体制の変化は起り始めた。両班と常民〔貴族階級と庶民〕の差異、性別の差異、職業の差異から発する身分階層間の葛藤と摩擦が克服されなければならなかった。その実験の場が“萬民共同会”，別名“官民共同会”であった<sup>52</sup>。独立協会が主催

したこの討論会は、身分と階級の差を問わず、誰でも参加し自分の意見を述べて討論を繰り広げることのできる民衆民主主義の試験場であった。政府高官官吏から下層人民に至るまで広範な階層の人々が一堂に会し、政治・社会問題について討論を繰り広げた。

1898年10月29日ソウル鍾路で開かれた“官民共同会”は、白丁〔ペクチョン・백정：畜殺などに従事した被差別階級民〕出身のキリスト教徒、朴成春（パク・ソンチュン）が講師として参席し演説をしたことでよく知られる<sup>53</sup>。病に苦しんでいた朴成春は、エヴィスン宣教師〔Avison, Oliver R, 米北長老教会医療宣教師, トロント大学医学部卒業, 法学博士〕から治療を受け、ムーア宣教師〔Moor, Samuel F, 米北長老教会宣教師, 両班と賤民との共同礼拝を開くなど、白丁を対象とした宣教活動で有名〕に感銘を受けキリスト教徒となった。白丁というのは伝統的朝鮮社会において最下位の身分階層であった。その彼がキリスト教徒になったのち、白丁解放運動の先頭に立ち、結局白丁に被害を与えてきたすべての身分制約規定を政府に撤廃させた。彼は白丁社会の指導者として現れ、白丁社会を背景にし、独立協会66人総代委員の一人になったのである。彼は官民共同会に参席して次のような要旨の演説をした。

「私は大韓帝国のもっとも賤しい身分の者であり、無知無分別の者であります。しかし忠君愛国の意味については大体わかっているつもりであります。従って利国便民〔国のためになり、民のために平安を与えること〕の道について言うなら、官と民が一つになってこそ、それは可能だと考えます。あそこに見える“日除け布”に譬えて言えば、一本の竹竿でその布を支えようとすれば支えきれません。しかし多くの竹竿を一つにたばね合わせれば、その力ははるかに大きくなります。願わくは、官と民とが一つとなり、心を合わせ我ら大皇帝の徳に報い、国運ますます栄えますように。」<sup>54</sup>

白丁のような下流身分階層が政府の官吏と両班たちの前で、これほどまでに堂々とした演説をすることができるという事実からだけでも、社会の変化を確認することができる。

このように萬民共同会は民衆の凝縮された力を背景にして、政治に対する、あるいは外部勢力に対する闘争を展開することが出来た。1898年3月に開かれた萬民共同会は民衆のデモに発展し、ロシア人教練仕官およびロシア人度支部〔タクチブ, 탁지부：大韓帝国時代の韓国「財務部」〕の二人の顧問の解任を求めて集まった<sup>55</sup>。この二人のロシア人は、国内の親露派の者たちが政府を親露傾向に導くため雇用した軍人と経済部門の顧問官であった。しかし萬民共同会が引き起こした世論のため、親露派の計画は失敗に終わり親露派政治家たちの退陣にまで及んだ。これと共に、ロシア公使館に逗留していた高宗の王宮帰還も果たされた<sup>[9]</sup>。政府が民衆の要求を受け入れ、政策の変更を実行したのである。このように、独立協会を通して民衆は自分たちの主張を表明することが出来るようになった。専制封建

主義の理念・体制の犠牲者となり、服従と犠牲のみを強いられて来た民衆階級が自分たちに賦与されている天賦の人権を認め、それに基づいて自分たちの主張をなし得るようになったのである。政府や両班階層も従来のように、昔ながらの発想で無条件に服従と犠牲を強要することは出来なくなった。説得と対話による協調を求めなければならなくなった。近代市民社会への転換は、このようにして成し遂げられようとしていた。独立協会は、キリスト教の力強い援助を受けながら、歴史発展への転機を備えたのである。

### III-(3) 独立協会事件後の知識人階層の入信

独立協会はキリスト教的理念を背景とした民族運動であった。そのためこの運動によって、キリスト教がこの国の知識人社会にも融合するという付随的な効果を得ることとなった。「無君無父」の宗教、野蛮人の宗教として認識されて来たキリスト教が、むしろ富国文明の基として認識され始めた。次の「独立新聞」の記事は、キリスト教に対するかかる認識の変化を端的に示している。

「世の中には宗教がたくさんあるが、イエス教のようにまことに宜しく、まことに愛に満ち、まことに他者を憐れむ宗教は世に二つとないであろう。一体いかなる宗教がこのイエス教のごとく、人々〔宣教師など〕を天下万国に遣わし、自分たちの金を使って、あらゆる艱難をことごとく受けながらも、他国の人々をこのように親切に教え助けてくれようか。」<sup>56</sup>

また次のような論評もある。

「イエス教が大韓にやって来てせいぜい10余年、愚昧なる民衆たちがこれに指差しながら言うには、王もなく父もない異端であると。しかし西国からやって来た宣教師の行いを見ても、大韓帝国の皇帝陛下を自分たちの王として認め、忠誠心が厚く、大韓帝国の人々を同胞兄弟として愛し救済しようとする態度はこの上もないゆえ、従って私たちはこの宗教が無君無父の教えであるとは信じない。」<sup>57</sup>

上の記事から、今や民衆階層のみではなく中流知識人階層もキリスト教を肯定的に受け容れていることがわかる。キリスト教を信じる階層の上昇が、実現していることがわかる。こうした知識人階層のキリスト教への教集団改宗が1898～1904年の間になされた。独立協会の解散が、その契機となった。独立協会は初期の忠君愛国的啓蒙運動として始まり、1898年に至り萬民共同会・官民共同会を経て政治参与運動として発展しつつ体制改



革を迫及し始めた<sup>58</sup>。1898年の「朴 泳孝大統領説」であるとか1900年の「日本留学生クーデター陰謀事件」も、こうした状況の変化を暗示してくれる<sup>[10]</sup>。このように独立協会が体制改革的な政治運動に発展しようとする、保守勢力は危険を察知し反対運動を開始した。それが裸負商(ポブサン, 보부상)を動員した“皇国協会”であった<sup>[11]</sup>。彼らは「社会安全」を掲げて萬民共同会の現場を急襲したりすることで、保守勢力の積極的な対応政策を主張して出た。両側の武力衝突がしばしば起きた。結局高宗は1898年12月に、いかなる政治的・示威行為も集会も禁止するという勅令を発し、二つの団体[独立協会と皇国協会]を解散させる形で独立協会の機能を停止に追い込んだ<sup>59</sup>。すでに徐 載弼は、政府側の圧力を受け1898年5月にアメリカに帰還した後であった。その後の独立協会を主導していた尹 致昊, 李 承晩, 李 商在, 洪 正厚たちの間に運動路線に関する不一致が生じたことも、独立協会が無力化し解体してしまった要因の一つであった。結局、独立協会の表立った活動は1899年以降消え去ってしまった。

さらに保守勢力の反撃は続き、「朴 泳孝大統領推戴事件」によって李 承晩が1898年に逮捕されたのを筆頭に、「日本留学生クーデター陰謀事件」によって李 商在, 李 承仁(イ・スンイン[李 商在の息子]), 李 源兢(イ・ウオンゴン), 兪 星濬(ユ・ソンジュン[兪吉濬の弟]), 洪 在箕(ホン・ジェギ), 金 貞植, 安 国善(アン・グックソン[安駟寿の養子])などが、また「秘密結社 改革党事件」によって李 僑(イ・ジュン)が逮捕された。培材学堂の学生・申 興雨(シン・フンウ[李 承晩の学友])も「朴 泳孝事件」によりこの時逮捕された。ほとんどが保守勢力の政治的反撃による犠牲者たちであった<sup>60</sup>。彼らほとんどが独立協会の主導者であったという点から、一連の事件が独立協会に対する保守勢力の反撃の意味が強いことを感じさせる。

これらの人々は政治的な犠牲者であるとともに敗北者でもあった。独立協会による政治改革の意志は挫折してしまった。特に政治的野望を強く抱いていた李 承晩の場合、その被害者意識は他の者より激しかった。彼が脱獄を試みたのも、同じ脈絡から理解することが出来る<sup>61</sup>。彼らは漢城監獄に閉じ込められながら、政治的敗北を反芻した。

しかしながら、漢城監獄[現、鍾路十字路。道路をはさみ鍾閣の東側にあった]は彼らに新しい人生の転機を備えてくれた。監獄の所長、金 英善(キム・ヨンソン)は、意識の高い官吏であり、彼は囚人たちに読書を許し、培材学堂教師 申 冕休(シン・ミョンヒュ), 囚人・李 承晩, 申 興雨[申 冕休の弟, 李承晩の学友]が主導教育する獄中学校の開設を許可した<sup>62</sup>。読書室も準備した。図書は主に、アペンゼラー, アンダーウッド, バンカー, ゲイルら宣教師たちが設置してくれた。西洋の歴史・政治関係の[漢文]書籍『列国変通盛記』『中西四大要』『九九新論』『近代教士列伝』『英興記』『新政策』等だけではなく、キリスト教の[ハングル]伝道文書『파혹진선론[破惑進善論: 1887年発行, 盧 炳善(II-2, 参照)著, 本書の英

文版表題は“Introduction to Christianity”』『구세진전 [救世真詮]』『사민필지 [士民必知 1889年発行, ハルバー著]』『턴로력정 [天路歷程]』『인가귀도 [インガ クイド]』や『聖書』, および「キリスト新聞 [그리스도신문: 1897年創刊の週刊新聞, アンダーウッド発行兼編集, 発行所は米北長老会]」や「朝鮮キリスト者会報」のようなキリスト教新聞類も入っていた<sup>63</sup>。政治犯たちは初めは歴史・政治に関する本を読んだ。しかし時間が経つにつれ, 徐々にキリスト教関連の本などを読み始めた。聖書を読む頻度が増えた。外の政治的状况は, 自分たちには不利な方向に進行していた。それだけに, 宗教的図書を読む頻度が増した。この過程において, キリスト教への改宗が果たされたのである。まず, 李承晩が改宗した。1900年のことであった<sup>64</sup>。申興雨も同じ頃に改宗した<sup>65</sup>。彼らは獄中に学校を建て, 若い囚人たちを教えていた。宣教師たちも暇があれば訪問し, 獄中学校を中心に形成されたキリスト教徒の信仰共同体を支え, 手をかした。

開化派の象徴的人物であった俞吉濬, その弟であり政治的陰謀の容疑で逮捕された俞星濬(ユ・ソンジュン)も, 最初は政治的報復のみを夢見て過ごしていた。しかし年月を重ねるうちに自己の限界を感じるようになっており, そのとき蓮洞(ヨンドン)教会の教会員李昌植(イ・チャンシク)が差し入れてくれた聖書を読むようになった。しかし聖書の意味を理解することが出来なかった。1903年12月アンダーウッドが立ち寄って帰ったあと, 宣教師が教えてくれた通り祈ることを始めた。俞星濬の告白である。

「12月のある日, 祈っていると突然胸が張り裂けそうになり涙があふれ出た。すぐる40年間の人生を罪と悪のなかに送りつつも, 自分だけは道理にかなない正直に生きてきたのだと自負していた。しかし実際には, ただ自分の欲望を満たすために他人をだまし, だまされて生きて来た。自分の人生がそんな一生だったと悟ったからである。」<sup>66</sup>

俞星濬はこののち, 自分をだましおとし入れた政敵に対する怒りと復讐心が消え去ったと述べている。もし彼が獄に閉じ込められなかったとすれば, なすはずもなかった宗教的体験, すなわちキリスト教への改宗体験が成し遂げられたのである。俞星濬は農商工部局長を歴任した高位の政治家であった<sup>67</sup>。同じ頃, 同じ罪状で監獄に繋がれていた警務官出身の金貞植も, 同じような体験をした。彼も初めは哲学・政治書籍のみを読んでいたが, やがて聖書を読むようになり, そんなある日, 神秘的な幻想体験をすることになった。

「その後, 真夜中の深い静寂にかえって眠気をそがれた時のこと, 自然とこの身の哀れな境遇を思い返すにつけ, 眠られずに寝返りばかり打っていた。その時だ。イエスが, 私が横になっている敷布団に, 一緒に座っていらっしやった。イエスの膝を両手

でつかみ、私は次のように言った。——“わたくしには肉親である父母もなく兄弟もありませんので、自分の憐れで惨めな境遇を聞いてもらえる場所がありません。だから、私をこの上もなく愛してくださり、この上もなく親切にしてくださり、本当に憐れに思ってくださいるイエス兄上(예수 형님, イエス・ヒョンニム:[형님은「お兄さん、兄貴」に当る])にお話し致します。私は以前は酒色に溺れ、先祖には不孝の罪を犯し、妻子には薄情であり、友人に対しては高慢の罪が多く、さらに私の愛する娘、鶯似[エンサ]の歳が10才に満たなかった時にその両目が盲目となり、前が見えなくなったのを羅馬教堂養育院[カトリックの孤児院]に送ったのですが、時々その娘が両親に会いたくて叫んでいることを思うと、骨がしびれ五臓が溶けそうなほどに苦しくなりました。”——余りに多くの罪状と余りに多くの後悔を洗いざらい告げた時、私の両の目からは涙がまるで雨が降るように流れ、枕をぬらした。すると、イエスは手で私の背中を撫で、慰めて下さり“お前の悔い改めを私が知っているのだから、そんなに嘆き悲しまなくてよい”と言われた。そのお言葉が耳に入った時、その憐れに思ったださるイエスの声に感動して私は自然に心の平静を取り戻し、何か大きな荷物を降ろしたようでもあり、水に溺れているのに助けられたようでもあった。思うに、この世界に私のような罪人もいなかったであろうし、また今このような清らかな心を得た人間も私一人だけであろう。今からはいかなる状況に直面しようとも、この恩恵を忘れないようにしようと思決した。これまで犯してきた罪をこまごまと思い出すことによって今日このような恵みを受けるとは、本当に思いもかけないことである。」<sup>68</sup>

このような新生[靈的に新しく生まれ直すという意のキリスト教用語]体験は、彼の生を完全に変えてしまった。「イエス兄上(예수 형님)」に出会ったことは、決定的契機であった。彼は出獄後、キリスト教青年会[Y. M. C. A.]の活動に身を投じた。このほか、法部[法務衙門]教辦を務めた李 源兢、議政府参贊を務めた李 商在、扶余郡守・李 承仁、開城郡守・洪 在箕、会寧郡守・安 國善など、政府高位職にいた上流層の人物たちが監獄で改宗した<sup>69</sup>。彼らは社会情勢の変化によって1903～4年にすべて釈放され、以後キリスト者として政治・社会活動を展開した。また彼らは主にソウルの蓮洞(ヨンドン)教会、貞洞(チョンドン)教会に出席し、皇城キリスト教青年会の活動を導く中心人物となった。これらの人々の改宗は、他の知識人上流階層の人士たちの改宗を触発した。すなわち、金 昶斎(キム・チャンジェ)、朴 勝鳳(パク・スンボン)、尹 致昭(ユン・チソ)、南宮 憶(ナムグン・オク)、韓 弼相(ハン・ピルサン)、閔 濬鎬(ミン・ジュノ)、兪 昌兼(ユ・チャンギョム)、玄 采(ヒョン・チェ)、李 載馨(イ・ジェヒョン)、徐 丙哲(ソ・ピョンチョル)、朴 準禹(パク・ジュヌ)、趙 鍾萬(チョ・チョンマン)、金 時斎(キム・シジェ)、李 柱浣(イ・ジュワン)、咸 우택(ハム・

ウテク), 咸台永(ハム・テヨン), 呉경선(オ・ギョンソン), など両班・官僚出身のキリスト教徒が生まれたのもこの頃のことであった<sup>70</sup>。独立協会の指導者たちの集団改宗は, キリスト教が知識階層に浸透したということを確認させてくれる事件であった。史学者・李能和(イ・ヌンファ [李源兢の息子])はこの事件を「地獄即天堂」という表題で示し, 「是為官紳社会信教之始:これが官紳(官僚紳士)社会におけるキリスト教入信の始まりであった」と述べた<sup>71</sup>。

これによってキリスト教共同体[教会]のうちに, 両班出身の知識人階層が一定の勢力として位置を占めるようになった。彼らは地域的にはソウル・京畿を中心とした中部地域を基盤としており, 政治改革への試図が失敗に終わり辛酸をなめたのち, 宗教的体験を経てキリスト者となった者たちであった。これによって教会の中に民衆階層と知識人階層が共存することとなり, 急変する社会現実に対応する形態として民族運動を展開して行くことになった。

## 【IV】、日帝(日本帝国)の侵略とキリスト教徒による民族運動

### IV-(1) 初期, 非暴力抵抗運動

19世紀末に開始した韓国キリスト教の歴史は, ほぼ同時期に開始した日帝の朝鮮侵略・朝鮮強占(強制占領)の歴史と, 同じ歴史を進行することとなった。封建的専制主義社会秩序が崩壊しようとしつつも, いまだ民族固有の自主・独立国家の形成は果たされ得なかったこの時期, 日本帝国主義による武断統治と支配という現実が訪れたのである。すなわち, もう一つの別の[日帝植民地支配という]専制主義社会・政治秩序が構築されたわけである。

日本の韓半島に対する侵略の野望は, 日清戦争(1894年)の時から現れていたが, より具体的かつより露骨な侵略は日露戦争を契機として進行した。つまり, 1904年の日露戦争から1910年日韓併合時まで, 日本の侵略過程は成し遂げられた。日本の侵略は政治・外交・経済の分野において, 緻密かつ組織的に進められた。かかる日本の侵略に対抗する力のなかった当時の政権担当者たちは, 国を日本に引き渡す悪役になるしかなかった。しかし民衆は, そうではなかった。政府の裏切りも許せないものであったには違いないが, しかし日本の侵略こそは黙視することの出来ない歴史的な罪であり, 従って民衆階層による抵抗運動は必然的なものであった。

キリスト教もこの時期に, 激しい抵抗運動を繰り広げた。日本による政治・外交・経済侵略に対する抵抗運動は, 教会を中心にキリスト教信仰者の歴史参与として成された。

当時, 尚洞(サンドン)教会には青年伝道師, 全德基(チョン・ドッキ)がいた。そして教

会の青年会組織であるエプワース (Epworth) 青年会というものがあり、その組織は地方にまで拡張されていた<sup>72</sup>。全 德基はこのエプワース青年会を象徴する人物であった。彼の周辺には民族主義の気骨を備えた人物が集まって来た。監理教 (メソジスト) の李 弼柱 (イ・ピルチュ), 具 然英 (グ・ヨニョン), 鄭 淳萬 (チョン・スンマン), 朴 容萬 (パク・ヨンマン), 李 承晩, 盧 炳善 (ノ・ピョンソン), 金 鎮浩 (キム・ジンホ) などが集まり、その他に李 東輝 (イ・ドンフィ), 金 九 (キム・グ), 周 時経 (チュ・シギョン), 李 儁 (イ・ジュン), 李 東寧 (イ・ドンニョン), 安 泰國 (アン・テグク), 李 相高 (イ・サンソル), 崔 南善 (チュエ・ナムソン), 李 商在, 梁 起鐸 (ヤン・ギタク), 崔 在學 (チュエ・ジェハク) などが次々と集まって来た。いわゆる尚洞派 (サンドンパ) として知られているキリスト教民族運動が形成されたのである<sup>73</sup>。

尚洞教会の中には初等教育機関である“攻玉 (コンオク) 学校”と中等教育機関である“尚洞青年学院”があり、民族意識を高揚させる教育が実施されていた。周 時経の有名なハングル講習と、崔 南善・張 道斌 (チャン・ドビン) の国史教育もここで開始された<sup>74</sup>。

尚洞派の抗日運動は、「乙巳 (ウルサ) 保護條約 [別名, 乙巳五條約, 日韓保護條約, 第2次日韓協約, 1905年]」の無効を訴える上疏運動として始まった。このことは、当時 鎮南浦 [チンナンポ: 現北朝鮮, 平安南道] のエプワース青年会代表としてソウルに上京し、尚洞教会に逗留しつつ上疏 (じょうそ) 運動に参加していた金 九の次の証言に詳しく述べられている。

「このとき私 (金 九) は鎮南浦エプワース青年会の総務として代表の任を帯び、京城 (ソウル) 大会に出席することになった。大会は尚洞教会で開かれたが、表面的には教会の事業を議論することにし、その内実は純然たる愛国運動の会議であった。義兵闘争を決起した人々の運動が旧思想の愛国運動であったとすれば、私たちイエス教徒の運動は新思想による愛国運動だと言えよう。

そのとき尚洞教会に集まった人物は、全 德基, 鄭 淳萬, 李 儁, 李 東寧, 崔 在學, 桂 明陸 (ケ・ミョンニョク), 金 仁澁 (キム・インジュブ), 玉 觀彬 (オク・クァンビン), 李 承吉, 車 炳修 (チャ・ピョンス), 申 尚敏 (シン・サンミン), 金 泰淵 (キム・テヨン), 表 永珪 (ピョ・ヨンガク), 曹 成煥 (チョ・ソンファン), 徐 相八 (ソ・サンパル), 李 恒植 (イ・ハンジク), 李 喜侃 (イ・ヒガン), 奇 山濤 (キ・サンド), 金 炳憲 (キム・ピョンホン), 柳 斗煥 (ユ・ドゥファン), 金 基弘 (キム・ギホン), そして私, 金 龜 (キム・グ=金 九) であった。

私たちの会議の結果として決定作成したことは、斧をもって上疏する、という点であった [朝鮮時代, 官僚や兩班たちは王に書面などで直接上訴する権を有したが、これを「上疏, じょうそ; 상소, サンソ」と言う。また, 聞き容れられなければ自分の首をはねてもらふ覚悟で,

斧を添えて上疏することもあった。つまり一回、二回と4～5名ずつで連盟し上疏して、たとえ死のうが捕らえられ獄に入れられようが、何度でも繰り返そうというものであった。」<sup>75</sup>。

このようにして有名な“イエス教徒たちの戴斧上疏”がなされた。1905年11月26日「乙巳保護条約」締結前後のことであった。第一次は崔在學、金仁濊、申尚敏、李始榮（イ・シヨン）、田錫俊（チョン・ソクジュン）が連盟して上疏を呈した。他の者たちも鄭淳萬の先導により祈ったのち、大漢門〔テハンムン；徳寿宮の正門。晩年の高宗は、毒殺死するまで徳寿宮に住んでいた〕に繰り出した。大漢門で日本の警察官と衝突が起こり、一次上疏人5名が逮捕され連れて行かれた。大漢門から追い出されたキリスト者たちは、鍾路に繰り出して行きそこで大衆集会を開いた。すると日本の警察官は、銃を撃って集会を解散させた。その場で数十名が逮捕された<sup>76</sup>。

尚洞教会に再び集まった指導者たちは、その後方法を変えることにした。名前だけの皇帝に上疏を呈するという旧時代的な方法では、日本の侵略を阻止することは出来なかった。民衆による団結力、これのみが日帝の侵略を阻止しうるものだ。そこで彼らは分散し、そして民衆の啓蒙を目的とした教育事業に力を注ぎ始めた<sup>77</sup>。

上疏運動以降、尚洞教会はさらに組織的な抵抗運動を展開した。朴斎純〔パク・ジェスン、乙巳五賊の一人〕など親日派民族反逆者を処刑するため、平安道の壮士たちを呼び集めて訓練することまでしたりした。旧韓末の歴史家、鄭喬（チョン・ギョウ）の証言である。

「我が国のイエス教徒、全德基、鄭淳萬などは新条約（乙巳保護条約）締結以後、毎日尚洞教会に集合し午後7時から9時まで国のため神に祈っていたが、こうした男女信徒は一千名に達した。のちに全德基、鄭淳萬は信徒と平安道の壮士数十名とを集め、やがて朴斎純らを誅殺する計画であったが、日本軍の守りが厳しかったためその志を達成することは叶わなかった。」<sup>78</sup>

このようにして集まった尚洞派民族運動群は、1907年には“新民会”というより体系化した民族運動の母体となり、1911年の“105人事件”<sup>[12]</sup>が勃発するまでキリスト教民族運動の求心点として、民族の受難を克服しようとする民衆啓蒙・務實力行〔ムシルヨッケン；実りのあるように真面目に実行すること〕の主演をつとめた<sup>79</sup>。1907年のハーグ密使事件<sup>[13]</sup>も尚洞派と密接なかわりがあった。

これにあわせ、1907年には抗日抵抗運動という性質のゆえのキリスト教徒の自殺事件が発生した。ハーグ密使事件が起きた6月30日、ソウル仁旺山〔イヌァンサン：鍾路区と西

大門区の境界に位置する 338 m の山] およびチャン洞において、朴 泳孝の歓迎の祝宴が開かれた。閔 丙奭(ミン・ピョンソク)、尹 雄烈(ユン・ウンニョル)、金 중환(キム・ジョンファン)、金 嘉鎮(キム・カジン) など高位高官層が集まった。宴の途中「貞洞教会信徒」鄭 在洪(チョン・ジェホン) が自分の腹に拳銃を発射した<sup>80</sup>。

死亡した鄭 在洪の死体からは「思想八變歌(ササンバルピョンガ)」と「生死榮辱歌(センサヨンヨクカ)」という歌が出てきた。「皇城新聞」に掲載された「思想八變歌」の全文である。

- 「一番：国と関わりのある奴で、とにもかくにも憎い奴を、一撃で殴り殺したならば、この私の憤怒は溶けて無くなるだろう。
- 二番：だがうまく殴れず、殴りそこねたら、むなしく自分だけが死ぬ。
- 三番：[殺したあと] 六連発銃を素速く置き捨てて、素速く走りされば、大事にはならないで済む。
- 四番：そこで、すぐに六連発銃を買った。
- 五番：しかし、相手を殺し、私が生きれば、天のことわりに反するだろう。
- 六番：相手を殺して、私も死のう。
- 七番：だが、一人が相手を殺し、その一人が自分で死んでも、両者は仇になるだけだ。
- 八番：一人私だけ死に、それによって全国民が感動すれば、この身は榮譽となり、国には幸をもたらすことになるう。」<sup>81</sup>

鄭 在洪の最初の目的は、李 完用、李 根澤(イ・グンテク)、李 趾鎔(イ・ジョン)、朴 齋純、権 重頭(クオン・ジュンヒョン) たちを銃殺することであった。事を起こすため彼は拳銃を買った。最初は敵を殺して自分は生き残る方法を講じたが、それは難しいことだと分った。そこで、敵を殺して自分も死ぬという道考えた。しかしもしそうすれば、ただ二人の間が仇敵関係になってしまうだけの[個人的関係]に終わってしまう。そこで彼は結局、自分だけが自決することによって、抵抗の意義を全国民に伝えるという[公義の]道を選んだのである。「生死榮辱歌」で表現したように「志士 10 名のみが国のために死んで行けば、失った国権は取り戻すことが出来る」という言葉が彼の信念であった。彼は自決することによって、民族の魂を国民に教え悟らせようとしたのである。彼は南山・褒忠壇(チャンチュンダン) 公園前に暮らす商人出身のキリスト教徒であったが、教会に通ううちに民族意識に目覚め、仁川にある仁明義塾(インミョンウィスク)の教頭を務め民族教育を行なってきた民族志士であった。鄭 在洪の葬儀は貞洞教会で執り行われた<sup>82</sup>。鄭 在洪の殉国によって民族運動の世界にはもう一度奮起を促す契機が与えられ、「皇城新聞」「대국(テグク)新聞」

が主催し「志士 鄭在洪君 遺族救助義捐金」募金運動を大々的に繰り広げた<sup>83</sup>。

同年(1907年)7月22日、もう一人のキリスト者、洪太順(ホン・テスン)が自殺した。高宗が日帝によって強制退位させられた直後のことだった。「大韓毎日申報(テハンマイルシンボ)」の記事である。

「宣教師 自裁-楊州居 基督教 牧師 洪太順氏が 再作日 午後 四時 大漢門에서 韓皇의 禪位를 憤慨하여 毒藥을 呑하고 自殺하였다」<sup>84</sup>

伝道師という身分である楊州[ヤンジュ:京畿道,議政府の旧称]に居住するキリスト教牧師・洪太順は、高宗の退位に憤慨し徳寿宮大漢門の前で一昨日服毒自殺を敢行した<sup>85</sup>。

自殺は、力なき民衆が圧制者に抵抗するための最大の武器であった。力なき民衆は自分の命を自ら進んで絶つことによって、独裁者の暴力に抵抗したのである。キリスト者の自殺も、かかる視角において解釈されるのである。無力さを目の前に置き、そうして侵略者、侵入者である日本に向かって、非暴力抵抗運動を繰り広げたのである。

#### IV-(2) 後期, 武力抵抗運動

キリスト教徒たちの自殺事件が発生した翌年の1908年、アメリカにおいて韓国の一キリスト教徒が拳銃でアメリカ人を射殺するという事件が起こった。

1908年3月23日、サンフランシスコ駅構内でアメリカ人外交官スティーヴンス(D. W. Stevens)が銃弾を受けて倒れた<sup>86</sup>。倒れたアメリカ人の前で二人の韓国人が「大韓民国, 萬歳!」と叫び、警察に逮捕された。犯人は張仁煥(チャン・イヌファン)と田明雲(チョン・ミョンウン)であった。スティーヴンスは、張仁煥の銃弾を受け絶命した。田明雲が先に発射したが不発に終わり、それに続いて張仁煥が発射した銃弾にスティーヴンスは当たったのだ。逮捕された張仁煥は群がる記者たちのところに行き、明晰にその理由を次のように述べた。

「いまさら多くの言葉は必要もなく、日本人が韓国に対し不義の行為を犯していることはこの世の全てが知っている通りである。スティーヴンス、この者は韓国顧問官として韓国の支給する給与を食みながら、反対に日本の側に与し、韓国同胞二千萬人をひそかに毒殺しているのである。我が国を滅ぼそうとする盗賊を無くしてしまわなければ、我々は日本人の手によって滅ぼされてしまうのだ。だから体中にふくれ上がった自分の憤怒をどうすることも出来ず、国敵を無くしてしまひ殺身成仁(仏に成る)すれば、私のような義士たちが継続して自分のあとに続いて来ることを私は願うのだ。



もし自分の生命のことを考え、命を維持しようとしても、私の父母妻子 兄弟姉妹が毎日日本人に虐殺されようとしているのであれば、生きていても仕様がなではないか。」<sup>87</sup>

張 仁煥は平壤出身の監理派のキリスト者であった。1905年ハワイ移民船に乗り労働者となってハワイ・マユ島で肉体労働をしたあと、翌年アメリカ本島に渡って行った。鉄道労働者として、あるいはアラスカ漁場の労働者として仕事をしながら、大東報国会館民族運動団体に加入し民族運動に参加していた<sup>88</sup>。

スティーヴンスという人物は、当時韓国政府の外部（外務部）顧問官という職責をになっていた。すなわち韓国政府に雇用されていた官吏であった<sup>89</sup>。彼が任用されたのは、1904年に締結された韓日協約〔韓日議定書、第一次日韓協約〕に従って、日本政府が推薦した顧問官雇用規則によるものであった。彼は財政顧問マッカーサーと共に、日本政府の推薦を受けて韓国政府に雇用されたのであった。スティーヴンスの表面上の上官は韓国政府の外務部であったが、事実上の上官は伊藤博文であった。彼（スティーヴンス）は韓国政府のあらゆる外交文書を検閲・監督しつつ、日本に有利な外交政策を展開した。彼は韓国に来る前は在米日本公使館顧問、つまり日本外務省の官吏として日本政府に忠実な召使の役割を果たしてきた。韓国に来て、彼が最初になした業績は「乙巳保護条約（1905年）」締結であり、その後も“丁未七條約〔日韓新協約、第三次日韓条約、1907年〕”までの種々条約締結に関わり続け、国権を日本に移譲するよう画策した。

丁未七条約締結後彼は特別休暇をもらい、米国内における反日の雰囲気や和らげるため本国に帰って来たのだった。彼はアメリカに到着するや、日本を絶賛する内容の記者会見をひらいた。

「韓国に李 完用のような忠臣や伊藤博文のような統監がいることは幸いなことであり、東洋の大いなる幸いである。私が韓国の情勢を見るに、太皇帝〔生存中に帝位を譲った前帝の名称〕の徳は甚だしく失墜し、また何とも頑迷な党派勢力が国民の財産を盗み取り、国民は幼稚で独立する資格もないので、だから日本が奪わなかったら既にロシアが奪い取っていたはずだ。」<sup>90</sup>

このような彼の言動は在米同胞たちを激しく憤らせ、ワシントンに向けて出発しようとするスティーヴンスを、〔抗日運動団体である〕“共立協会”会員の田 明雲と“大東報国会”会員の張 仁煥が、両人の間に何らの事前の申し合わせなど一切ないまま、同じ時刻に狙撃したのであった。張 仁煥はアメリカの裁判にかけられ、25年の懲役刑を宣告された<sup>91</sup>。

1909年12月、今度は国内でキリスト教徒のテロが起こった。李 完用襲撃事件である。主犯は平壤出身のイエス教徒（監理教教会員）・李 在明（イ・ジェミョン）であった<sup>92</sup>。李 在明は安 昌浩（アン・チャンホ）の講演を聴き民族運動に目覚め、1905年アメリカに渡った。初期移民たちのほとんどそうであったように、彼はハワイの農場で労働したのち、1906年本島サンフランシスコに移った。そこで「共立協会」という民族運動団体に加入して活躍し、ハーグ密使事件が起きた直後、売国奴を肅清するために1907年10月帰国した。最初は伊藤博文を狙っていたが、1909年10月満州ハルビンにおいてキリスト教徒 安 重根（アン・ジュンゴン）・禹 徳淳（ウ・ドクスン）による狙撃事件が勃発するや、その対象を李 完用に変えた。金 炳祿（キム・ピョンノク）、金 정익（キム・ジョンイク）、李 東秀（イ・ドンス）、全 泰善（チョン・テソン）などと共に李 完用を初めとした売国奴暗殺計画を立て、遂にその最初の挙行として李在明は1909年12月22日、明洞聖堂（ミョンドン・カトリック教会）で行なわれたベルギー皇帝追悼ミサに参席した李 完用をナイフで攻撃した<sup>93</sup>。李 完用は重傷を負ったが命は繋ぎ止め、李 在明は逮捕され日本人判事が主宰する法廷で死刑を宣告された。

回復した李 完用によって、韓日合邦〔韓国併合〕が調印された直後の1910年9月21日、李 在明は西大門刑務所において絞首刑に処せられた。彼は乱れることなく整然とした姿勢をくずさず死刑台にのぼり、最後の望みは何かと言う執行官の質問に対し、平素口ずさんでいた賛美歌を歌った。それは「賛美歌」にある“イエス様はお救い下さる”であった<sup>94</sup>。

1909年10月満州ハルビンにおいて、日本の朝鮮侵略の第一等功臣・伊藤博文がキリスト教徒によって狙撃された<sup>95</sup>。天主教徒〔カトリック教徒〕安 重根が主犯として逮捕されたが、この事件にはこれに関わった別のキリスト教徒がいた。尚洞教会出身で乙巳五條約締結後シベリアに亡命していた監理教教徒、禹 徳淳〔ウ・ドクスン：別名、禹 連俊（ウ・ヨンジュン）〕であった。彼は安 重根と共に、この大事に最初から関与しており、狙撃の機会をうかがいチェガク駅〔채각역〕で伊藤を待っていたが、物ものしい警備のために志を遂げることが出来なかった。しかし彼は事件の直後、主犯の一人として逮捕され牢獄の苦痛を経験させられた<sup>96</sup>。彼はシベリア亡命直後、咸鏡北道の国境地帯で義兵として活躍していた武装闘争家であった。

彼は安 重根と一緒に大事を起こす直前に、決断の心情を吐露した詩を作っているが、その詩には武装テロに対する信仰者の意識を窺うことが出来る。

「会った 会った 仇敵のお前に 会った、  
お前に一度会おうと 一生涯願っていたが、余りに遅かったこの出会い。  
お前に会おうと万野を掛け巡り 水陸幾万里を ある時は船で ある時は列車で、

千辛万苦を繰り返す 露・清（ロシアと清国）両地を越えながら。  
座っている時も 立っている時も 天を仰いで祈りつつ、  
憐れみください 憐れみください 主イエスよ 憐れんでください、  
この半島の 大韓帝国を 私の願いどおり 救ってください。」<sup>97</sup>

このように武力による積極的な抵抗運動を追求したキリスト教徒たちに対し、キリスト教の世界の一部では教理的理由のゆえに憂慮を表明したり、あるいはそれを罪だと断罪する者まであったが、しかしキリスト教徒たちの積極的武装闘争は一般社会では肯定的に受け入れられていた。禹 徳淳・安 重根事件の直後、暴力テロに対する非難がキリスト教界に存すことを知った民族言論紙「大韓毎日申報」は、次のような反論を掲載した。

「今、韓国の宗教信者の中には、國家を論じる者は上帝〔神〕に対する罪びとであるとか、或いは民族を思う者は魔鬼〔悪魔〕の教徒であると断ずる者があるが、果たしてこれは正しいものか。」<sup>98</sup>

また張 仁煥によるスティーヴンス狙撃事件以後にも、アメリカ・サンフランシスコで発行されていた「共立新聞」は次のような内容の社説を掲載し、保守主義的信仰者の偏狭な國家観を悲観した。

「我が韓国のイエス教徒は、口を開けば旧約・新約〔聖書〕に基づいて國家を治めると言うが、それはとても信じられない——。韓国のイエス教徒がどんなに新・旧約聖書に精通しようとも、こと國家に関する事柄について言えば、いかにして軍隊を拡張し、いかにして教育を発展させ、いかにして法律を改正し、いかにして財政を管理すべきかについてはまったく無知蒙昧である。では、何によって國家を治めるのか。私はイエス教に反対しているわけではない。しかし私たちイエス教同胞が願うのは、十字架を負い十戒を守るその心で、國家組織と國民團結のために必要な政治や法律も研究すべきだということである。」<sup>99</sup>

教会内ではキリスト教徒の武装闘争に対し賛否両論が存したが、しかし少なくとも民族運動の系列においては、キリスト教徒たちの積極的抗日闘争を「民族愛の十字架信仰」として解し、高く評価していたというのが事実である。

神学的論争における善し悪しの問題はさておくとしても、以上のようなキリスト教徒たちの武装闘争は、それが日帝による侵略と支配という現実に対する積極的抵抗運動であつ

たという点、およびそれが否定すべき社会現実に対する強力な改革意識の反映であったという点、これらの点だけは確かな事実である。さらにこうした積極的武装闘争を繰り広げたキリスト教徒たちの背後勢力については、ソウルの場合は“民衆階層”が主流をなした尚洞教会がその背後勢力であり、そして西北地方出身のキリスト教徒の場合には旧韓末期日帝の経済侵略の犠牲者として海外亡命あるいは移民した“民衆階層”がその背後勢力であった、という点を指摘しておく必要がある。すなわち“民衆階層”の積極的抵抗意識と闘争論理が、旧韓末の武装闘争という形で表出されたのである。

〈(以下、【三】に続く)〉

## 原注

- 36, 開化派および開化党については、李 光麟 (イ・グァンニン) 「開化派の形成」: 『開化党研究』一潮閣、1985所収, pp.1 ~ 66参照。
- 37, 同上, pp.8 ~ 17.
- 38, 李 光麟 「甲申政変に関する一考察」: 同上所収, pp.140 ~ 146.
- 39, 独立協会の組織および性格については、慎 鍾度 (シン・ヨンハ) 『独立協会研究』一潮閣、1976が代表的で、キリスト教との関連における独立協会運動を考察した論文としては李 萬烈 (イ・マンニョル) 「韓末キリスト教徒の民族意識動態化過程」: 『韓国基督教と民族意識』知識産業社、1991所収。朴 ジョンシン 「韓国現代史における改新教の位置—独立協会運動を例として」: 『シアル・ソリ (民衆の声)』99号、1989. 3. 所収, など参照。
- 40, 李 光麟 「徐 載弼の開化思想」: 『韓国開化思想研究』一潮閣、1981, 所収, p.109.
- 41, 材培学堂のサンムン出版社で「独立新聞」を印刷した期間は、1898年5月から1900年廃刊までの2年間であった。李 光麟 「徐 載弼の“独立新聞”刊行について」: 李光麟, 同上書所収, pp.171 ~ 173. “W. B. Scranton, Superintendent”. *OMAM*, 1898, p.24. D. M. Davies, *The Missionary Thoughts and Activity of Henry Gerhard Appenzeller*, Drew University, New Jersey, 1986, p.185.
- 42, 尹 炳奭 「独立協会の活動」: 『韓国史』18巻, 国史編纂委員会、1984, 所収, pp.157 ~ 158.
- 43, 「独立新聞」1896. 7. 2. 尹 炳奭, 同上, p.159.
- 44, 尹 炳奭, 同上所収, pp.161 ~ 187.
- 45, 朴 容玉 (パク・ヨンオク) 「萬民共同会」, 同上所収, p.236.
- 46, 「独立新聞」1896. 11. 24. “The Corner Stone of Independence Arch”, *KR*, Nov. 1896, pp.457 ~ 458. これ以外にもイエス教徒たちの“示威的集会”についての新聞報道は種々なされている。すなわち1896年8月高宗誕生日に教会員二千余名が集まったという記録(「独立新聞」1897. 8. 26)があり、また材培学堂の教師・学生たちが主導した朝鮮開国紀元節祝賀行事(「独立新聞」1897. 8. 17。「朝鮮キリスト人会報」1897. 8. 19) などがある。
- 47, 「独立新聞」1896. 7. 23.

李 徳周 「初期韓国教会の民族教會的性格」【二】(2/3)

- 48, 李 萬烈 「韓末基督教徒の民族意識動態化過程」:『韓国基督教と民族意識』, 上掲所収, pp.272 ~ 283. 参照。
- 49, 同上, 李 萬烈 p.282. 尹 炳奭 「独立協會の思想」:『韓国史』18卷所収, pp.181 ~ 184.
- 50, C. Liem. *America's Finest Gift to Korea: The Life of Philip Jaison*, The William Frederick Press, New York, 1952, p.51.
- 51, 尹 炳奭 「独立協會の活動」, 上掲書所収, pp.213 ~ 221.
- 52, 朴 容玉, 上掲書所収, pp.223 ~ 235参照。
- 53, S. F. Moor, "The Butchers of Korea", *KR. Apr.*, 1898, p.132. 李 徳周 『韓国キリスト教徒たちの改宗物語』 チョンマン社, 1990, pp.61 ~ 71.
- 54, 鄭 喬 (チョン・ギョウ) 『大韓季年史』 光武二年 戊戌條.
- 55, 朴 容玉, 上掲書所収, pp.241 ~ 258.
- 56, 「独立新聞」1896. 8. 20.
- 57, 「独立新聞」1898. 12. 24.
- 58, 李 萬烈, 上掲 「韓末基督教徒の民族意識動態化過程」 pp.276 ~ 283参照。
- 59, 朴 容玉, 上掲書, pp.268 ~ 280参照。
- 60, 鄭 喬, 上掲書, pp.3 ~ 14, 65 ~ 69, 76 ~ 77, 84 ~ 85, 87 ~ 88, 122 ~ 129. 李 光麟 「舊韓末 獄中での基督教信仰」:『韓国開化史の諸問題』, 一潮閣, 1986. 所収, pp.218 ~ 222.
- 61, 徐 正敏 (ソ・ジョンミン) 「旧韓末, 李 承晩の活動と基督教」:『韓基史研 (韓国基督教史研究)』18号所収, 1988. 2, p.10.
- 62, 李 承晩 「獄中伝道」:『神学月報』1903. 5, p.184. 李 光麟, 上掲書所収, pp.225 ~ 231.
- 63, 徐 正敏 「舊韓末獄中圖書貸出者名簿・1903. 1. 17 ~ 1904. 8. 31」: 徐 正敏, 上掲書 pp.13 ~ 14.
- 64, 李 承晩 「獄中伝道」, p.183. R. T. Oliver, *Syug Man Rhee: The Man Behind the Myth*, Dodd Mead and Company, New York, 1955, pp.94 ~ 98.
- 65, 全 澤晃 (チョン・テクブ) 『人間・申興雨』 大韓基督教書会, 1971, pp.58 ~ 59.
- 66, Yu Sungchun, "How I became a Christian", *KMF*, Jul., 1928, p.134. 兪 星濬 「信仰の動機と由来」:『基督新報』1928. 7. 11.
- 67, 兪 星濬 (ユ・ソンジュン), 同上 『基督新報』1928. 7. 11 ~ 7. 25. F. Brockman. "Mr. Yi Sang Chai", *KMF*, Aug, 1911. pp.218 ~ 219. 李 能和 『朝鮮基督教及外交史』, 朝鮮基督教彰文社, 1928, p.202.
- 68, 金 貞植 (キム・ジョンシク) 「信仰の動機」:『聖書朝鮮』100号所収, 1937. 5, p.8.
- 69, 全 澤晃 『トバギ (韓国育ち/韓国っ子) の信仰山脈』 大韓基督教出版社, 1977, p.85.
- 70, 李 能和, 上掲書, pp.202 ~ 204.
- 71, 同上, 同箇所。
- 72, 「エプワース青年会」というのは1897年韓国監理教会の中に設立された, 教会の青年団体である。ウェスレーの故郷である「エプワース」(Epworth) から名前を採ったものだが, アメリカでは1889年に初めて創設された。韓国では1897年5月, 韓国宣教連会でエプワース青年会を設立することを決議し, その年の内にソウル, 仁川, 平壤などの教会に青年会が設立された。「青年会」:『朝鮮基督人會報』1897. 9. 8. 「平壤青年会」:『朝鮮基督人會報』1897. 11. 17. 「青年会」:『朝鮮基督人會報』, 1897. 11. 10. 「エプワース青年会 別報」:『大韓基督人會報』, 1898. 1. 26. 李 徳周 「初期韓国教会

- 女性団体に関する研究—ジョイス会とポホヨ会を中心に—:『監理教会と歴史』4巻2号, 1990. 12, 所収, pp.22～23.
- 73, 「尚洞派」と呼ばれる尚洞教会エプワース青年会あるいは青年学院の活動については以下を参照。宋吉燮(ソン・ギルソプ)『民族運動の先駆者, 全德基牧師』, 尚洞教会歴史編纂委員会, 1988。尹春柄(ユン・チュンピョン)「全德基牧師と尚洞青年学院考察」:『金チョルソン教授古稀紀念論文集』, 監理教神学大学院, 1988所収。韓圭茂(ハン・ギユウム)「舊韓末 尚洞青年学院に関する研究」:『韓基史研(韓国基督教史研究)』27/28合併号所収, 1989, 11. 参照。
- 74, 韓圭茂, 同上, pp.12～15.
- 75, 金九(キム・グ)『白凡逸志』, 三中堂, 1983, pp.139～140。鄭喬『大韓季年史』, p.191.
- 76, 金九, 同上, 同頁。
- 77, 韓圭茂, 上掲書, pp.11～17.
- 78, 鄭喬, 上掲書, p.191.
- 79, 尹慶老(ユン・ギョソノ)『105人事件と新民會研究』, 一志社, 1990. pp.180～182.
- 80, 鄭喬, 上掲書, p.255。「皇城新聞」1907. 7. 1.
- 81, 「皇城新聞」1907. 7. 2.
- 82, 「皇城新聞」1907. 7. 4: 7. 8.
- 83, 「志士鄭在洪君遺族救助義捐金募集趣意書」:「皇城新聞」1907. 7. 2.
- 84, 「大韓毎日申報」1907. 7. 24。洪太順は正式の按手札を受けた牧師ではなかったとは言え, 京畿道楊州に居住し福音を伝える伝道者であったことは事実であったようだ。
- 85, 鄭喬, 上掲書, p.274.
- 86, 「大韓毎日申報」1908. 3. 25。「共立新報」1908. 3. 25。李徳周「ステイーブンス暗殺事件」:『韓基史研(韓国基督教史研究)』11号, 1986. 12所収, pp.13～15.
- 87, 「共立新報」1908. 3. 25.
- 88, 李徳周, 上掲書, pp.14～15.
- 89, 同上, pp.13～14.
- 90, 「大韓毎日申報」1908. 3. 25.
- 91, 盧ジェヒョン「在米韓人史録」:『独立運動史資料集』8 独立運動史編纂委員会, 1974所収, p.487。李徳周, 上掲書, pp.14～15.
- 92, 李徳周「第一次明洞事件の主犯・李在明」:『共存』6号, 1985所収. pp.7～12.
- 93, 鄭喬, 上掲書, pp.386～410。「大韓毎日申報」1909. 12. 23.
- 94, 李徳周, 上掲書, p.12.
- 95, 安重根事件については『韓国独立運動史』(資料6), 国史編纂委員会, 1983。『安重根自叙伝』, 安重根崇慕會, 1979。『独立運動先駆 安重根先生公判記』京郷雜誌社, 1946。尹慶老「安重根思想研究」:『民族文化』第3集, 漢城大學民俗文化研究所, 1985, 所収など参照。
- 96, 李徳周「天主教徒と共に銃を取ったイエス教徒・禹徳淳」:『共存』5号, 1985所収. pp.22～30.
- 97, 「大韓毎日申報」1910. 2. 18。「禹徳淳先生回顧談」, 『独立運動先駆 安重根先生公判記』, 京郷雜誌社, 1946所収, p.91.
- 98, 「大韓毎日申報」1910. 2. 26.
- 99, 「共立新報」1908. 6. 10.

## 訳者注

[8], 1882 (明治15) 年, 首都漢城 (ソウル) で起こった旧軍人 (朝鮮兵士) と市民による大々的な「反閔氏政權」「反日」暴動。この暴動が起きた年の干支から「壬午軍亂」と称される。

1881年, 当時日本との関係が深かった朝鮮政府・閔氏政權は, それまでの朝鮮兵士による旧軍隊を廃し両班の子弟を集めた「別伎軍」という新式軍隊を作り, 日本公使館付武官, 堀本礼造少尉を教官として迎え訓練を施していた。これに伴い旧軍隊は軽視され給与米も支給されず, やっと10カ月ぶりに支給された米1カ月分も官吏の不正により, 量はならずしかも砂や異物が混ざっていた。ここに旧軍人の怒りは爆発。加えて「日朝修好条規」に基づいて大量の朝鮮米が日本に輸出されていたため深刻な米不足, 米価騰貴に苦しんでいた市民も呼応し, 「反閔氏政權」「反日」大暴動に発展した。日本公使館は激しい襲撃を受け背走・逃亡, 閔氏政權も一時的ではあったが倒壊し大院君の再登場となるなど, 日本追放および政權転覆を招くほどの大暴動となった。この事態を鎮圧・收拾したのは中国・清国軍であった。これによって清は朝鮮において多くの利権を手に入れるとともに, 朝鮮との関係も日本より優位に立ち, かかる日清の関係を背景に後の日清戦争へと繋がっていく。

[9], 1896年2月11日から約1年間に渡り, 高宗と皇太子が王宮を離れ, ロシア公使館に移り住み政務もここで執った。これを俄館播遷あるいは俄館露遷と言う。

朝鮮に野心を抱く日・清・露3国のうち, 清はすでに1894年の日清戦争で敗退し, 残るは日・露2国であり, 両国の朝鮮における争いは1904年の日露戦争まで続く。

1896年頃までに日本が行なった政策や行為 (軍制改革, 断髮令, 閔妃虐殺, 陽曆採用など) の故に, 反日闘争の気運は韓国中に満ち満ちていた。特に1895年の閔妃虐殺事件以降, 日本の蛮行に恐れを抱いていた高宗と皇太子は, 当時のいわゆる親露派, 李 範晋, 李完用やロシア公使ウーベルに誘われ, 貞洞のロシア公使館に移る。同時に高宗は親日の五大臣 (金 弘集, 兪 吉潐など) らに逆賊の烙印を押し, 金 弘集, 魚 允中らは群衆に殴り殺され, 兪 吉潐らは辛うじて日本に亡命した。そして新たに朴 定陽を首班とする親露内閣を立てた。しかし朝鮮に対する利権をむさぼるロシアのやり方 (国境地帯の森林伐採権, 地下資源の独占化, 軍制のロシア化など) に対する反露気運の増大に伴い, また国民の強い願いもあって, 1897年2月20日高宗と皇太子は慶雲宮 (現, 徳寿宮) に帰還し, 同年10月皇帝に即位し, 国号を大韓帝国と名乗る。

[10], いずれも保守派官僚, 趙 秉式や閔 種黙たちによる根も葉もない捏造事件。

独立協会, 萬民共同会の大成功と勢力に恐れた保守官僚たちは, 独立協会がアメリカ式の大統領制を布き共和国を作り, 朴 泳孝を初代大統領に据え, よって王政を廃止しようとしているなどと事実無根の手紙を作成して事件を捏造したり, あるいは日本に留学した韓国人学生たちがクーデターを起こし王政転覆を企てているなどとした捏造事件。

[11], 襍負商とは, 行商 (襍商) と背負い商 (負商, 荷物を負い運搬する) を総称化した語。

商社会軽視の韓国史にあつて, この襍負商だけは独自の横のつながりを有す恐らくは唯一のギルト的組織を形成した点で注目に値する。彼らは定期市を渡り歩き, 全国的な組織を有していた。襍負商の歴史は古く新羅時代に発するが, 特に朝鮮王朝建国に際し李 成桂は襍負商に協力を要請したり, 秀吉による壬辰倭乱時には全国数千人の襍負商が朝鮮軍の食料の調達運搬に動員されたとか, 東学農民戦争の鎮圧にも数百名の襍負商の指導者が動員され功を立てているなど, 重要な政治変革期には政權側に協力して来た歴史がある。韓末期の1886年, 政府は「襍負省」を設置するなどして,

この功を認めかつ利用。

1898年設置の裨負商による「皇国協会（最初の名称は「皇国中央総称会）」も、こうした歴史上に並ぶ裨負商の政治権力への協力の一として理解される。なお、独立協会は高宗の解散命令にもかかわらず、萬民共同会の開催を繰り返し、皇国協会会長・李 東基は全国裨負商を召集してこれを襲撃させるなどして多数の負傷者を出した。李 承晩ほかの両班たちはこの頃、終身刑などに処され、本論に述べられる漢城監獄の生活に入る。

- [12], 「105人事件」の日本での公式名称は「寺内朝鮮総督謀殺未遂事件」。韓国併合（1910. 8. 22）からわずか4カ月後の1910. 12. 28-29. にかけて、初代総督寺内正毅が朝鮮北西部、平安南・北道を視察に出向いたが、このとき主に地元のキリスト教徒たちが寺内を計画的に暗殺しようとしたとする日本側による全くの捏造事件。

この捏造事件は綿密に日本側が計画したもので、根も葉もない事件のでっち上げにより七百余名が検挙、127名が起訴され、105人（内、93名がキリスト教徒）が第一審で有罪判決を受けた。ここには尹致昊、金九、梁起鐸、李昇薫、李東輝ら民族主義キリスト教徒の指導者、独立協会・萬民共同会・尚洞派の精神を受け継ぐ基督教団体「新民会」（秘密結社）の指導者たちが多数含まれていた。実質的な指揮を取ったのは総督府警務総監・明石二郎であった。明石の指示により過酷な拷問が加えられ、4名拷問死、3名発狂。「105人」が最終的に第一審でそれぞれ実刑判決が言い渡されたが、不思議なことに結局は全員釈放される。

しかし、肝心のキリスト教団体「新民会」自体は、この事件の打撃によって自然消滅化せざるを得なかった。つまり、この事件によって総督府本来の目的は達せられたのである。——— 朝鮮総督府がその統治に際し、最大の障害と見ていたのが「朝鮮キリスト教」であった。本捏造事件は、その時期（併合直後）、規模（キリスト教の息の根を止めようとする検挙者数、拘束者数、起訴者数）、結末（全員釈放）などの全てが、この大捏造事件の真の意図と目的を如実に示していると言えよう。すなわち、開始したばかりの総督府朝鮮統治にとっての最大の「目の上のコブ」が「朝鮮キリスト教」であることを日本側は十分に心得ており、それゆえに統治の初めにこれを消滅しようとした。

- [13], 1905年、日露戦争に勝利を取めた日本はソウルに伊藤博文を派遣し、ソウル市内の要所要所を日本軍が包囲するなか、韓国閣僚を恫喝し「乙巳保護條約（第2次日韓協約）」を強行締結させた。

その2年後、1907年6月オランダ・ハーグで世界40カ国代表が参加する「第2回万国平和会議」が開催。日本のやり方に憤りを抱き続けて来た皇帝高宗は、同会議で日本の非道を万国に訴えるため、李 儁、李 相尙、李 瑋鍾らを密使としてハーグに派遣。しかしこの会議は「平和会議」とは名乗るものの、実態は当時の帝国主義列強による軍備抑制、戦争法規作成を目的とするものであった。イギリス、日本による強力な妨害のなか、かろうじて語学に堪能な李 瑋鍾の演説がなされたものの、成果はなにも得られず李 儁はその地で自殺した。

日本はこの事件を口実に、皇帝高宗を脅し退位を迫る。平和会議から1カ月後の1907年7月、李 完用の邸宅に放火するなど民衆の怒りが頂点に達するなか、純宗への讓位式典がソウルで執り行われた。